

## "好き" の声から、すべてが始まる ～重松かおりさん～

「大学生の長男からとても嬉しい言葉もらったことがあって……」

と言って顔をほころばせる重松かおりさん。京都市亀岡市に住む、大学1年生・高校1年の息子さん、小学校6年生の娘さんがいるお母さんです。

福幸塾とは、ご長男が小学校3年生のときからのお付き合いであり、かれこれと10年を越します。ご長男はすでにじゅくを離れています。重松さんはじゅくせいを続け、今なお毎月のメンテナンスセッションに積極的に参加しています。

重松さんは、オーダーメイド雑貨を販売するお店「Felice (フェリーチェ)」を週1回開き、その2階で3年ほど前から手作りコスメやハーブなどを作る講座とワークショップも開いています。オーダーメイド、手作り、にこだわるのは、「好きなものに囲まれて暮らしていくことがすごく大切なことだから」という重松さん。そこには、子育て世代のお母さんが、ハッピーで楽しく過ごしてもらいたい、という思いが込められています。



「自分の周りを大好きなもので囲むことは、自分の気持ちを喜ばせているのと同じ。そうして自分が楽しくハッピーに過ごせば周りの人もいい影響になりますし、前向きな気持ちは自信にもつながります。自分への自信は、我が子に対する自信ともなり、それを感じた子どもたちもとても嬉しくなると思うんです」

「それこそ、お母さんが笑っていれば世界平和に繋がるのではないかと、思っているぐらいです(笑)」

ご長男を産んでからの2、3年は忙しくて記憶にない、という重松さん。自らのこの体験があったからこそ、重松さんのメッセージと活動には、子育て中のお母さんを包み込み、しっかり支えようとする深い優しさを感じます。

そんな重松さんですが、思春期の頃は自分にまったく自信がなく、好きなものが見つけれなかった、といいます。“これかな?”と思っても、すぐその思いにフタをしてしまうことの繰り返し。自分の“これ”というものがなかったから、人のお世話と応援ばかりでした。それが「自分の好きなこと」と思っていたけど、本心からくるものではなかったことに気づきます。お姉さんとともに初めて行ったビーズのお店で、目の前に広がるきらびやかなビーズを見たとき、その瞬間でした。

「初めて心から“自分の好きなものと出会った! ビーズに囲まれた!”と思いました」

自分に気持ちに対するこの気づきが、重松さんにとって今の思いにつながる大きな原点となっています。

「Felice」や講座・ワークショップ、そして過ごし方もこうした自分の理念で続けられたのは、「これまでのことが“言語化”できているおかげ」ともいう重松さん。だから、福幸塾の毎月のメンテナンス・セッションで自分にとって欠かせないもの、といいます。毎月欠かさず参加するセッションは、自らを振り返り、向き合う場。言語化することで新たに得る気づきで、自分の立ち位置を常に確認し、次に進む方向を定めていきます。

「自分のこれまでを把握できるから、ビジネスにも活用できるし、本当の自分を維持し続けられたと思っています」

大好きなもので自分の周りを囲み、心を満たし自分を大事にしたからこそ、子どもに対する過度な要求など出ることもなく「ただいてくれるだけでいい」と自然と思えるようになった、とも重松さんは語ります。

そういった環境で育っていった息子さんたちは、自ら進路を自分で決め、それぞれが自分に見合った学びの方法を見つけ出し、定めた目標を達成していくようになりました。そんな息子たちの姿に、素直に「あなたたち、すごいね」とご長男に投げかけたときに返った言葉は、「母ちゃんの子やからな」。

「親としても最高の褒め言葉ですよ。これは本当に嬉しかったです」

「好きなものに囲まれて過ごす」。

自分自身を大切にすることとして、これからも重松家では親から子へと語り継がれていくのではないのでしょうか。



「Felice」のハンドメイド・ワークショップで、自分の“好き”を探してみよう!!

あなたの心の扉を開き、物語を紡ぎます。  
制作&記事: ことはじめ/ライター 白銀華

